



# JSIMD News Letter

## 北川照男先生 追悼号





1978年9月8日  
大浦敏明先生、多田啓也先生と



第六回ゴーシェ病治療薬の開発研究班会議 平成6年3月26日



1995年10月2日  
Dr. Brady、衛藤義勝先生と

# JSIMD News Letter KITAGAWA MEMORIAL



2006年9月12日～16日  
第10回国際先天代謝異常学会  
(千葉・幕張メッセ)

Welcome Reception



2006年9月12日～16日  
第10回国際先天代謝異常学会  
(千葉・幕張メッセ)

遠藤文夫先生、井田博幸先生らと



2006年9月12日～16日  
第10回国際先天代謝異常学会  
(千葉・幕張メッセ)

Welcome Receptionにて  
衛藤義勝先生ご夫妻、Dr. Kochご夫妻  
多田啓也先生と



2006年9月12日～16日  
第10回国際先天代謝異常学会  
(千葉・幕張メッセ)

Welcome Receptionにて  
石毛信之先生、大和田操先生、鈴木 健先生らと



2006年9月12日～16日  
第10回国際先天代謝異常学会  
(千葉・幕張メッセ)



2006年9月12日～16日  
第10回国際先天代謝異常学会  
(千葉・幕張メッセ)

Congress Dinnerにて、Dr.Schuchmanと

# JSIMD News Letter KITAGAWA MEMORIAL



2010年7月17日～18日  
国際小児難病フォーラム(東京プリンスホテル)  
「新生児スクリーニング」の座長、大和田操先生と



2012年4月1日～4日  
第2回アジア先天代謝異常学会(韓国)  
カラオケ、Dr. DH Leeと



2012年4月1日～4日  
第2回アジア先天代謝異常学会(韓国)  
シンポジウムの座長、Dr. Padillaと



2013年11月27日～29日  
第3回アジア先天代謝異常学会  
第55回日本先天代謝異常学会  
(千葉・東京ベイ舞浜ホテルクラブリゾート)

井田博幸大会長、衛藤義勝先生、大橋十也先生と



2013年11月27日～29日  
第3回アジア先天代謝異常学会  
第55回日本先天代謝異常学会  
(千葉・東京ベイ舞浜ホテルクラブリゾート)

鈴木 健先生、大和田操先生、Dr.Yangと



2013年11月27日～29日  
第3回アジア先天代謝異常学会  
第55回日本先天代謝異常学会  
(千葉・東京ベイ舞浜ホテルクラブリゾート)

井田博幸大会長、千葉ロッテマリーンズ  
「M Splash!!」と

## 日本先天代謝異常学会初代理事長 北川照男先生を偲んで

日本先天代謝異常学会 理事長  
東京慈恵会医科大学小児科学講座 教授  
井田 博幸

日本先天代謝異常学会初代理事長北川照男先生が2018年12月18日に逝去されました。ここに日本先天代謝異常学会を代表して先生の功績を紹介するとともに先生の思い出を記載し哀悼の意を表したいと思います。

北川先生は昭和25年に東京慈恵会医科大学を首席で卒業されました。昭和32年に世界で初めて肝腎型チロシン症の臨床例を報告するとともにその病態を明らかにしました。世界初例の報告を可能にしたのは先生が並外れた臨床力と生化学の知識を有していたからだと思います。昭和34年に東京慈恵会医科大学小児科講師に昇格され、昭和35年から昭和37年までウイスコンシン大学に留学されました。昭和41年に東京慈恵会医科大学小児科助教授に昇格され、昭和46年には日本大学医学部小児科教授として栄転され、平成4年までの21年間にわたって日本大学医学部小児科において多くの後進を育成されました。

日本先天代謝異常学会は昭和40年に設立された小児代謝研究会を母体としています。この小児代謝研究会は昭和59年10月に学会に昇格しました。そして、その初代理事長に北川先生が就任され、その後、平成4年3月まで理事長を務められました。その後、理事長は多田啓也先生、衛藤義勝先生、遠藤文夫先生に引き継がれ、現在、私が5代目の理事長を務めています。先天代謝異常症に関する大きな事業として公費による新生児マススクリーニングがあります。この事業は平成52年に開始されましたが、これに伴い特殊ミルクの安定供給が必要となったため、昭和56年に特殊ミルク共同安全開発事業がスタートしました。北川先生は設立時から特殊ミルク共同安全開発委員会の委員長に就任され、亡くられる前までその職責を全うされました。

北川先生は日大を退職されるまで日本小児科学会理事、日本先天異常学会理事、日本マススクリーニング学会理事、日本腎臓病学会理事、日本小児腎臓病学会理事長、日本小児内分泌学会理事、日本人類遺伝学会理事など多くの学会の要職を努められるとともに文部省、厚生省、東京都などの公的機関において委員として活動し多大な貢献をされました。これらの功績により平成4年に紫綬褒章を受章されています。

北川先生は日本大学医学部小児科教授退任後も日本大学総合医科学研究所の教授を努められ、平成6年に日本大学名誉教授を授与されました。その後、国際学院埼玉短期大学教授を経て、平成9年から平成27年までの18年間、東京都予防医学協会理事長を務め、新生児マススクリーニングの発展に大きく寄与されました。以上のように長年にわたって我が国の医学の発展に貢献した功績により平成9年に北川先生は勲三等瑞宝章を受章されています。

以上、北川先生の功績の概要を記載しましたが、ここに記載したのは先天代謝異常症に関する業績のみです。先生はそれ以外にも腎臓病や糖尿病の領域でも素晴らしい業績を残しておられます。まさにスーパー小児科医であり、スーパー研究者です。私見ですが北川先生は予防医学を重要視し、早期診断・早期治療をいつも考えていたのではと思います。そして、鋭い臨床的視点から問題点を明らかにし、基礎医学を用いて問題点を解明していくというスタンスをお持ちの先生でした。特に私の印象に残っているのは先生が79歳の時にNon-invasive screening method for Fabry disease by measuring globotriaosylceramide in whole urine samples using tandem mass spectrometryという論文を筆頭著者としてMolecular Genetics and Metabolismに発表された事です。ご高齢になっても小児科医としてのセンスを磨き、研究心を持ち続け、その成果を英文の論文に残したことに私は深い感銘を受けました。

先生の推薦文には以下のような文章があります。“北川氏は長年にわたり終始一貫して小児科学の研究と教育に携わり、清廉潔白を信条として、自らを律し温厚誠実をもって奢ることなく後進の指導育成に力を注ぎ、学会のリーダーとして高邁な見識と人格は国内のみならず海外でも高く評価され、我が国の学術の進歩と教育の発展に大きく寄与した”。また、“北川氏は円満温雅な人柄と外柔内剛な性格を有している”とも記載されています。まさに北川先生の業績と人となりを表していると思います。先生はいつも私にニコニコして接してくださいましたが、臨床と研究には大変、厳しく「井田君も大分、頑張っているけどマダマダだね」と言われていた事を思い出します。

このように書く北川先生が順風満帆な人生を歩んで来られたように思いますが、少なくとも学生時代は苦勞されていました。先生が東京慈恵会医科大学に入学したのは昭和20年4月ですが、戦争が一番激しい時期でしたので、先生は埼玉県児玉郡にあるお寺に疎開し、自炊をしながら授業を受けていました。しかし、軍需工場や農村での勤勞奉仕に借り出され満足な授業も受けられませんでした。食糧難のため毎日、近隣の農家を訪ねて米や野菜を買い集め、その食材を使って素人集団の医学生が雑炊を作り食べるという今では信じられないような生活をしていました。下宿先のお寺には蚤が繁殖し、痒みに悩まされました。ついに北川先生はこのような生活に耐える事ができず寺を出ていくという苦難の時代を過ごしました。これ以外にもご苦勞されたことがあったと思いますが、先生はそれをバネにして小児科医そして研究者として生きて来られたのだと思います。

北川先生が設立した日本先天代謝異常学会を発展させることが私に与えられた責務だと思います。先生に「井田君、日本先天代謝異常学会は学術的にも国際的にも立派になったね」と仰っていただけるよう頑張りますので、いつもの柔和な笑顔で天国から見守ってくださるようよろしくお願いいたします。

## 北川照男先生ご逝去を偲んで

第3代日本先天代謝異常学会理事長  
東京慈恵会医科大学名誉教授  
衛藤義勝

平成29年12月18日(月曜日)北川照男先生は91才の長寿を全とうされ、天国に旅立ちました。巨星墮ちるという感じで、大変残念であります。

北川先生には私は医学生時代から、1966年以来約半世紀以前まで坂登り、大変お世話になった先生であります。医学部3年生の時に山岳部の先輩で酒井糾先生(元北里大学泌尿器科教授)に誘われて当時大学棟東講堂の脇にあった小児科代謝研究室で試験管洗いのついでにアミノ酸代謝異常症のろ紙でのスクリーニングを始めたのが最初で、その時北川先生は講師でチロシン症の研究を熱心にされておりました。研究には大変情熱と厳しさをもっておられた先生ですが、時に飯田橋のバーでは鼻にたばこを二本差し込んで、騒いでおられた楽しい先生でもありました。学生時代のポリクリでWolman病の患者を持たされ、剖検組織を当時の伝染病研究所(現東大医科研)の山川教授の元に出かけて脂質を分析をするようにということで東大生化学教室にでかけたのが現在のライソゾーム病の研究にのめり込んだきっかけでした。その後約50年間ライソゾーム病一筋で研究を進めてきました。

さて北川先生の業績としては、かなり広い分野でご活躍されました。慈恵医大助教授から日本大学駿河台病院小児科教授になられ、小児の学校検尿の導入、尿蛋白の検査から腎臓病の早期発見に努められました。小児腎研究会を発足され、現在日本小児腎臓学会に成長、小児の糖尿病もやはり学校健診から発見し、小児糖尿病の分野にも貢献、更には小児代謝研究会を50年前に東北大学の多田啓也教授と設立、現在の日本先天代謝異常学会に成長しました。従って、先生は小児腎では酒井糾先生、伊藤克己先生(前女子医大小児腎教授)足立先生、糖尿病、代謝関係では青木菊麿先生(香川栄養大和田操先生(前日大小児科教授)、崎山武先生(聖マカ員教授)、伊藤文之先生、又日大の浦上先生他多数の先生方を育てられました。多くの先生の業績から勲3等並びに紫綬褒賞を受けられました。先生は大変紳士あられ、奥様も裏千家の家元の関係から何時も丹精でおしゃれないで立ちでした。私の人生の節目には何時も相談相手をしていただきました。今でも多くの思い出が過ぎります。先生の亡くなる前日駿河台病院にお尋ねし、最後のお別れに病室を訪ねました。先生はまだ微かに意識があり、私のお話を聞き、微かに笑顔で嬉しそうな印象でした。呼吸の苦しそうな中でも、何とか話そうと努力されておりました。最後に強く手を握り、ああこれで最後のお別れかと無常さを感じましたが、先生の人生の大きな幕引きを終え、唯々感謝の気持ちで一杯です。先生の心ころからのご冥福をお祈りいたします。(東京慈恵会医科大学 昭和42年卒、衛藤義勝)

## 北川照男先生とセレンディピティ

第4代日本先天代謝異常学会理事長  
くもと江津湖療育医療センター総院長  
熊本大学名誉教授  
遠藤文夫

北川照男初代日本先天代謝異常学会理事長の訃報に接し、心よりご冥福をお祈りいたします。私がこれまでの医師、研究者として過ごしたなかで、北川先生の存在はまことに大きいものでした。

私事ですが、1976年に熊本大学を卒業し、そのまま小児科学教室に入局した私は、着任されたばかりの松田一郎先生のご指導を受けることになりました。松田先生の情熱と素晴らしい見識、そして野心あふれる姿に感動しながら、先天代謝異常症の勉強を始めました。研修医を終わるところから日本先天代謝異常学会あるいは日本マススクリーニング学会にも出席するようになり、北川先生のご指導ぶりには感銘を受けておりました。当時の先天代謝異常学会は、まだ小さな研究会でしたが、多田啓也先生、北川先生などがリードされていた活発な会でした。私自身は、1978年から1979年にかけて松田一郎先生のご指示があり、徳島大学酵素科学研究所で生化学と酵素科学の勉強をしました。その後、熊本に帰り大学院生としての研究生活を始めました。

1957年に北川先生は高チロシン血症肝臓腎臓障害を伴う疾患を報告されました(An atypical case of tyrosinosis (l-parahydroxyphenyllactic aciduria) Part 1. Clinical and laboratory findings. Jikeikai Med. J. 4, 1-10)。北川先生の若かりし頃、そして私が小学校に入ったばかりの頃のことです。この患者の記載は世界で最初の肝臓と腎臓の臓器障害を特徴とする高チロシン血症の症例でした。生化学的な分析も詳細に行われ、4-ヒドロキシフェニルピルビン酸酸化酵素活性が顕著に低下していることが明らかにされました。この病型は、後に遺伝性高チロシン血症1型と呼ばれる疾患です。北川先生は1型の世界で最初の報告者ということになります。これが北川先生のセレンディピティです。

私は1979年に新生児マススクリーニングでたまたま見つかった高チロシン血症の患者さんの生化学的分析を行うことになりました。チロシンはスクリーニング項目外のアミノ酸でしたが、この患者さんは抗生物質服用中だったために検査センターで最新の液体クロマトグラフィー分析がなされ、それによって血中チロシンの高値が発見されたのでした。この患者さんが、後に遺伝性高チロシン血症3型という新しい疾患として記載されることになる症例でした。欠損酵素の解析、遺伝子のクローニング、動物モデルの発見と解析、3型患者の遺伝子解析などの一連の仕事を通して、3型という病型をきちんと確立していくことができました。これが私のセレンディピティです。この間の私の研究が深く北川先生とかかわっていくことになります。

わたしが4-ヒドロキシフェニルピルビン酸酸化酵素活性が欠損する疾患を「肝腎障害を伴わない新しい病気である」として報告したところから、北川先生のお考えとは真っ向から

対立することになり、学会でも厳しい質問を数多く受けることになりました。まだ若い30歳くらいの私は平気な顔で受け答えをしていました。生意気で傲慢な私は何も気にしていませんでしたが、恩師の松田一郎先生は少しだけ気をもまれていました。しかし松田先生と私は、自ら進んで疑問を解明するために研究を前へ前へと進めていったわけです。結局は遺伝子のクローニング、動物モデルの発見と解析、3型患者の遺伝子解析などを私たちが達成することで、この議論には決着がつくことになります。

時は移り、1997年秋のウィーンでのことです。わたしは国際先天代謝異常学会 (ICIM) で栄えあるプレナリーセッションの講演の機会を与えていただきました。高チロシン血症に関する一連の研究成果を発表させていただきました。とくに北川先生が発見された肝腎型(1型)における肝臓腎臓の障害は肝臓細胞と腎尿細管上皮細胞がアポトーシスにおちいることに起因するということを発表しました。これは皆さんに大変喜んでもらいました。

そのときウィーンに出発する前に、北川先生の業績も併せて報告したい気持ちもあって、北川先生からお写真と古い論文を貸していただきました。その写真をここに紹介いたします。

セレンディピティとは偶然に思いもよらぬ発見をすることについて言われることです。「肝腎型高チロシン血症」と「肝臓障害のない高チロシン血症」の発見ということは双方ともにまさにセレンディピティでしょう。北川先生と私の交流も、稀にしかない、しかも奥深いものであったこと、これもある意味でセレンディピティであろうと思います。

このようなことで私と北川先生の関係は学問的な厳しい意見の交換からはじまりましたが、長年にわたり親しく接していただき、様々なご指導もいただき、またご迷惑もおかけしたのではないかと思います。次第です。

北川先生には深く感謝しています。ご冥福をお祈りいたします。



写真1: 私がウィーンの学会の時に北川先生の業績を紹介するときに使用した北川先生(左)のお写真。これは学会で使用するために北川先生からいただいたもので、私にとっては記念となる写真です。

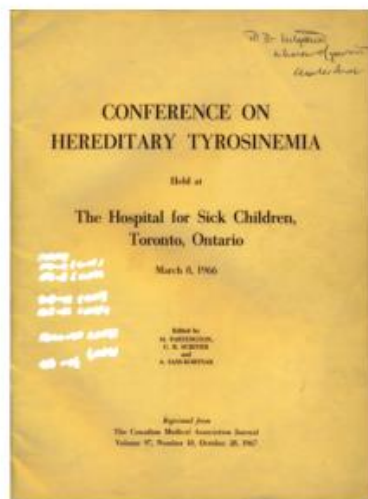
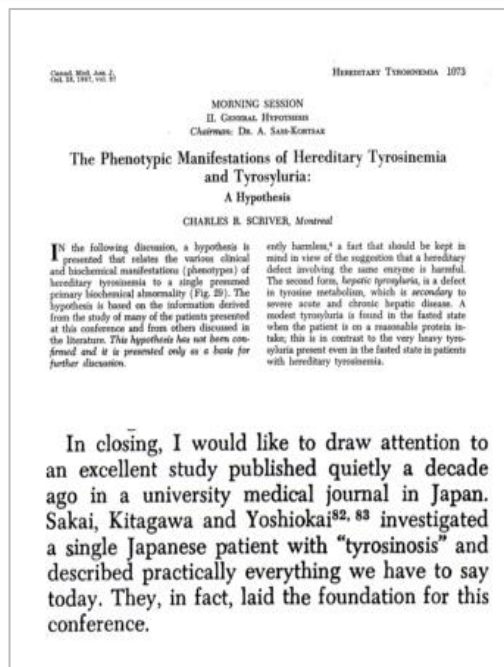


写真2: 高チロシン血症に関するCharles Scriver先生1966年の論文(上)。肝腎型高チロシン血症の発見者としての北川先生についての言及があります。表紙には北川先生への個人的なメッセージが手書きされています(下)。北川先生はこの論文を大変大事にしておられました。

## 北川照男先生を偲んで

日本マススクリーニング学会理事長  
日本先天代謝異常学会元理事  
島根大学医学部特任教授  
山口清次

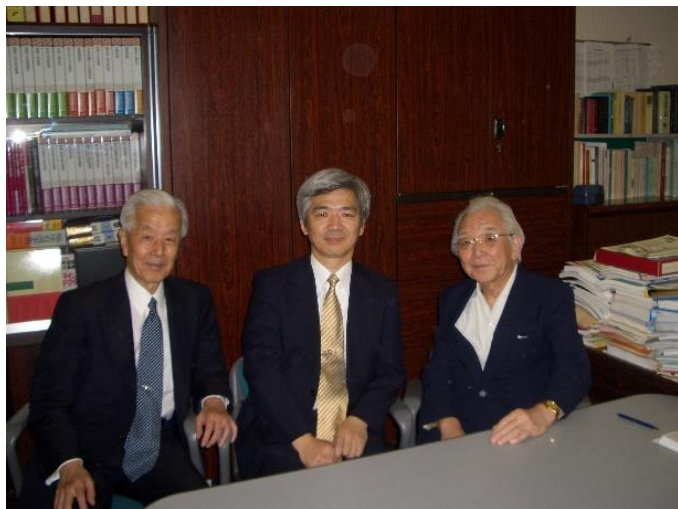
北川照男先生は、大学を卒業された1950年から亡くなられる2017年まで実に67年間、先天代謝異常の領域を中心に開拓者、教育者として貫かれました。私は主に新生児マススクリーニングの領域に入ってから、公私にわたりご指導を受けるようになりました。それまでは「北川照男」という名前は私にとって雲上人でしたが、細やかな気配り、的確な指摘、いつも変わらぬダンディズムに触れるにつれ、「北川先生のようにありたいものだ」と思うようになりました。

北川先生はてんぷらが好きで、よく「天一」という店に連れて行ってもらいました。そこで、研究のことのみならず、貿易商だった父親を早くなくしたこと、学生時代から東大生化学（山川民夫教室）に出入りしていたこと、高チロシン血症の新型を同定したこと、新生児スクリーニングの草創期のこと、フェニルケトン尿症などの特殊ミルク開発のことなどエピソードを聞かせていただきました。

戦後の貧しい日本で、研究設備の乏しかった1950年代に高チロシン血症の研究で世界に情報発信されたことは歴史に残る痛快事だと思います。そして1960年代には新生児スクリーニングの導入に努力され、1977年にアジアで最初に新生児スクリーニングが全国実施されると、1980年から特殊ミルク開発事業のリーダーとして治療、障害発生予防に心血を注がれました。

2013年5月に米国アトランタで「ガスリーテスト50周年記念国際マススクリーニング学会」が開催され、私は北川先生と一緒しました。米寿の北川先生は「日本の新生児マススクリーニング」という講演をされました。そしてその年に、講演の内容を日本マススクリーニング学会誌に刷り上がり8ページの英語論文を書いてくださいました。さらに2015年にも生化学関係の雑誌に書かれた英語論文を見せていただいたとき「北川先生は永遠に年を取らない人種ではないのか」と驚いたことを覚えています。

学生時代から亡くなられるまでの約70年間、知的好奇心が衰えることなく最後の最後まで、全力で走りぬかれました。日本では、1964年に日本代謝研究会（先天代謝異常学会）、1973年に新生児スクリーニング研究会（現日本マススクリーニング学会）ができましたが、北川先生の草創期からの力強いリーダーシップなしでは、現在の学会を語ることはできません。ご冥福を心よりお祈りします。



写真：愛育研究所長 坂元正一教授（当時産婦人科医会会長）を訪問された（2005年）。北川先生に連れられて愛育会を訪ね、タンデムマス・スクリーニングのご理解とご支援をお願いした（愛育研究所所長室にて。右から北川先生、筆者、坂元先生）。

## 北川照男先生とライソゾーム病

公益財団法人東京都予防医学協会  
大和田 操

昭和42年東京慈恵会医科大学医学専門課程を卒業した筆者たちは、一年間の「インターン」と呼ばれた研修期間後、1968年4月に9人の仲間が小児科を選択致しました。当時はインターン制度反対運動が最も盛んな時期であり、慈恵医大でも医師国家試験をボイコットしておりましたので、私たちは医師免許が無いまま、小児病棟に配属されて研修を開始致しましたが、同年秋には国試を受験して、温和しく「医師」となりました。それでも小児科学教室助教授の北川先生は42卒生との度重なる折衝が齎した心痛のために煙草を止めたと後に語っておられますので、Dr.北川の肺癌予防に42卒はお役に立ったと思います。Dr.北川は当時、先天性代謝異常症と腎疾患を研究課題とする「代謝班」の指導者でした。筆者は、理学部化学科で生物化学を専攻し、卒業後医学部に入りましたので、代謝班を迷わず選択致しました。その後、1971年4月、Dr.北川は日本大学医学部小児科教授に招聘され、駿河台日本大学病院小児科に赴任された半年後、筆者も駿河台小児科に移籍させて頂きました。そして、昨年12月18日、Dr.北川が急逝されるまでお付き合い頂いた不肖の弟子であります。

駿河台小児科で筆者が初めて担当した代謝病がⅡ型Gaucher病でした。既に慈恵小児科時代、筆者は本疾患を経験し、その酵素診断法をDr.北川の紹介で東京大学医学部生化学教室の飯田静夫助教授から御教示頂いておりましたので、患児の白血球 $\beta$ -glucosidaseを測定して診断しましたが、その測定には市販の合成基質(p-nitrophenyl- $\beta$ -glucoside)を使用致しました。しかし、その後、駿河台小児科には異なる病型のGaucher病が多く紹介され、精度の高い酵素診断には放射性同位元素標識の天然基質(glucocerebroside)が必要であると考え、Dr.北川の指示に従い、東大生化学教室へ国内留学させて頂き、山川民夫教授、飯田助教授の下で $H^3$ 標識のglucocerebrosideを合成し、それを使用した研究結果を多く報告することができました。また、Dr.北川外来には、ムコリビドーシスⅡ型(I-cell病)の患者が多く紹介され、私達はその生化学的診断についても報告して参りましたので、筆者は米国NIHのDr. Neufeldの研究室に留学させて頂き、更なる研究を行うことができました。これら治療法が開発されておらず、予後不良なライソゾーム病を経験した多くの方々からは、次の妊娠についての相談を受けることが多かったため、Dr.北川は日赤医療センター産科、雨森良彦部長に羊水採取を依頼し、私達は培養羊水細胞の分析を行ってその結果を報告してきました。日本におけるライソゾーム病羊水診断数については1987年の全国調査報告で205例が報告されておりますが、駿河台小児科で1971～2001年の間に行ったライソゾーム病の羊水診断は67例、全国の凡そ1/3の例を占めております。

そのうちGaucher病が25例(うちⅡ型が68%)、I-cell病が17例でありました。このように治療法が無く、かも予後が極めて不良なライソゾーム病の羊水診断の必要性について、Dr.北川は確固たる信念の下に取り組んでこられ、弟子の筆者も同様な考えを持って診断を行って来ました。

一方、ライソゾーム病の酵素療法について先鞭をつけたのはGaucher病の病因を明らかにしたDr. Bradyであり、既に1970年代からGaucher病の酵素補充療法について精力的に取り組む、多くの結果を報告しています。Dr.北川は当時からその研究に関心を示しておいででしたが、Ⅰ型Gaucher病の臨床効果が米国で報告されるようになった数年後、日本における臨床治験が開始された折の中心研究者はDr.北川であり、同薬の薬価収載に至るまで長期に亘って指導なさってられました。また、次に酵素療法が開発されたFabry病の臨床治験の指導者もDr.北川であります。上述の飯田助教授(後の東京医科歯科大学生化学教室教授)の指導により、私達は1980年代から酵素分析とともに蓄積物質CTHの同定によるFabry病の診断を行っていましたが、Fabry病の凍結保存尿のタンデムマス分析を行った結果、CTHのピークが確認され、本症の診断に有用であることを報告致しました。この仕事にもDr.北川は深く関与されております。

このようにライソゾーム病の臨床生化学研究の第一人者であるDr.北川が2018年12月18日に急逝なされ、残された弟子たちは3か月を過ぎた現在も呆然自失状態にあります。北川先生、これからも天国から私達を叱咤激励して下さい。合掌



写真: 幕張で開催された国際女性科学者会議における筆者の日本のボス、Dr.北川と米国のボスDr. Neufeldとのスナップ。筆者にとって大切な一枚です。

## 北川照男先生の思い出

社会福祉法人恩賜財団母子愛育会  
青木菊麿

私が1961年に慈恵医大小児科学教室に入局した頃、恩師國分義行先生は教授になられて2年目であり、教室の研究班作りに構想を練っておられた。その中の1つに代謝班があり、私はそれを選択した。その当時、米国に留学しておられた北川先生が翌年に帰国され、代謝班を指導されることになる。そこで初めて北川先生にお目にかかり、以来今日まで半世紀以上に及ぶ長い間ご指導を受けてきた。

先生は生化学に興味をお持ちで、1951年日赤医療センターでのインターン時代に小児のポルフィリアを経験され、尿中のポルフィリンの異性体を分析・同定して病型を決めたとのことである。東京大学医科学研究所に熱心に通われて、勉強されたようだ。母校の慈恵医大小児科学教室に入局当時、病棟で受け持った2歳の患児が肝脾腫とクル病を呈しており、たまたま尿のミロン反応を調べたところ深紅色を呈したのでそれを追及されて、肝腎型チロジン症を世界に先駆けて報告されたことは有名な話である。An atypical case of tyrosinosis を1957年から1959年にかけて Jikeikai Med. J. に報告されており、当時国内ではあまり認められなかったが欧米で注目されて世界の代謝病研究者達への繋がりに発展していったと伺っている。

2012年になって突然北川先生から英文の別刷りが送られてきて、大変に驚いたことがある。それは55年前に報告した前述の肝腎型チロジン症のその後の展開についての詳細な論文であり、先生が大変な勉強家であることをまた改めて知らされたことになる。長身瘦躯の先生で、小児の診察の仕方なども丁寧に教えていただいた。

1965年、日本小児科学会では当時の大阪市大高井俊夫教授、東北大学荒川雅男教授、慈恵医大國分義行教授を中心に先天異常委員会が設けられ、その機会に先天代謝異常に関心を持っている方々が集まって1965年3月に高井教授の主催で第一回小児代謝研究会が大阪で開催されたが、これが日本先天代謝異常学会の第一歩になる。同年7月に第二回代謝研究会が東北大学荒川教授により仙台で開催されたが、このときに北川先生に連れていただいて初めて研究会というものに出席した。研究会では数題の発表があったが、終了後に東北大学小児科の代謝研究室を見学させて頂いた。当時多田啓也先生が中心になって熱心に研究を進めておられたが、研究室の規模の大きさ、設備の整っていることに強い印象を受けた。慈恵の代謝研究室をもっと充実させなければと北川先生とご相談しながら帰京したことをよく覚えている。第三回代謝研究会は同年11月慈恵医大國分教授の担当で、先天代謝異常国際シンポジウムを開催した。当時東京大学高津忠夫教授主催の第11回国際小児科学会が東京で開催されており、来日中の当時の代謝異常専門家に集まって頂き、講演会を開催した。Bickel教授、Prader 教授、

Cornblath 教授、O'Brien教授、Waisman 教授らによる最先端の学者の講演を聞くことが出来た。また北川先生にとっても欧米の多数の研究者とゆっくり交歓する機会になったと聞かされたことがある。

このようにして小児代謝研究会は徐々に発展し、昭和59年から第28回日本先天代謝異常学会に昇格したが、初代理事長は北川先生であった。昨年は第59回が開催されており、学会は大きく発展してきたが、それは先生の長年におたご努力によるものであり、また学会の裾野を大きく広げて下さったのも先生のお力によるものと思う。当時の小児代謝研究会の頃が懐かしく思い出されるし、今昔の感に堪えない。

特殊ミルク安定供給事業は北川先生のご指導で続けてきた大事な仕事である。1981年から現在にまで及んでおり、37年目になる。先生が努力してこられた事業であり、これからも大切にしていかなければと改めて思う。1993年に特殊ミルク事業が第45回保健文化賞を受賞することがあったが、北川先生と関係者全員で喜びあい、懐かしい思い出の一つである。

40年前に遡るが、写真は1977年8月第6回国際神経化学学会に出席した折、ノルウェーのベルゲンを訪れて湾内のクルージングを楽しんだ際の一コマである。北川先生も私もまだ若かった頃であり、懐かしく思い出される。

北川先生は人生で最も大切な人間関係を重んじてこられた。人と人との繋がりを大切にされていたように思う。北川先生を中心とした先輩、同輩、後輩の間の関わりを常に考えておられた。人生の長い間の積み重ねにこのことは大変重要なことだと、改めて考えさせられるのである。いつも穏やかな表情で接して頂いたが、こちらが弛んでいると鋭い眼光で反省を促された。私が小児科医を志してから57年、北川先生のご指導を頂くようになってから53年、人生の大半は北川先生のご指導を頂いたことになり、改めて心より感謝申し上げる次第である。米寿を迎えられてもお元気であり、物事の相談に伺ってもいつも何かしらの答えを頂いた。常に何かを模索しながら、常に何かを考えながら、其の裏付となる文献を紐どいておられ、頭脳を休める暇はなかったのだろうか、頭の下がる思いがする。北川先生のご冥福をお祈りする



写真:1977年8月第6回国際神経化学学会、ノルウェーのベルゲンにて。  
北川先生(左)、青木先生(右)

## 北川照男先生を偲んで

東京慈恵会医科大学 総合医科学研究センター  
遺伝子治療研究部  
大橋 十也

北川照男先生のご逝去を悼み、ここに哀悼の意を捧げます。

北川先生と始めてお会いしたのは、多分昭和58年頃だったと思います。当時は慈恵小児科代謝班の大先輩である事は存知上げておりましたが、仰ぎ見るだけで直接お話などしたことはありませんでした。北川先生と初めて親しくお話できたのは、昭和63年に私がロスアンジェルス小児病院に留学した時です。ロスアンジェルス小児病院は、小児病院としては大きいのですが、いわゆるアメリカの大学病院や研究所から比べると小規模で、日本人留学生も数名という感じでした。その中に聖マリアンナ医科大学小児外科より御留学されていた北川先生の御次男がいらっしゃいました。家も背中合わせであり、また子供もほぼ同世代で非常に親しくさせて頂きました。そこに北川先生と奥様が、遊びに来られており、お食事など一緒にさせて頂きました。そのあたりより北川先生とのご縁が始まったと思います。北川先生は日本に新生児マススクリーニングを導入された御功績で有名ですが、ゴーシェ病の酵素製剤の導入でも主導的な役割を果たされました。次にファブリー病の酵素製剤も導入されたのですが、慈恵では衛藤先生が治験主任医師をしたこともあり、多くのファブリー病の患者さんが集まりました。北川先生はいち早く液体クロマトグラフィー質量分析法によるファブリー病の蓄積物質を血清、尿で測定する手法を立ち上げられ、共同研究でファブリー病酵素補充療法により血清、尿の蓄積物質にどのような変化があるかの検討を開始しました。北川先生は、必ず蓄積物質の減少程度には酵素製剤に対する抗体の影響があるとおっしゃいました。データを纏めて、様々な統計手法で検討してみると、確かに抗体の量が多い患者さんでは特に尿での蓄積物質の減少が悪いことがわかりました。北川先生は早速論文にするように指示されたのですが、私がなかなか書き上げないでいると、こういう風に書けば良いと、完成形に近い論文を送られてきて、その執筆力の凄さにびっくりしました。これはまだ12-3年前の話ですので北川先生もすでに80歳近かったと思います。その後、私もライソゾーム病の酵素補充療法と免疫応答との関係に興味が出てきて、幾つかの研究を行い、論文を書かせていただきました。また苦手だった免疫について、この頃より勉強を開始し、現在の遺伝子治療の研究にも大いに役立っております。また北川先生が主導で行なわれた、腎不全患者のスクリーニングでも少しだけ協力が出来、スクリーニングの重要性を理解する事が出来ました。先生との共同研究は現在の研究にも波及しえており、本当に良い思い出です。

北川先生、安らかに眠りください。

合掌

## 北川照男先生からいただいた一生の宝物

埼玉県立小児医療センター  
望月 弘

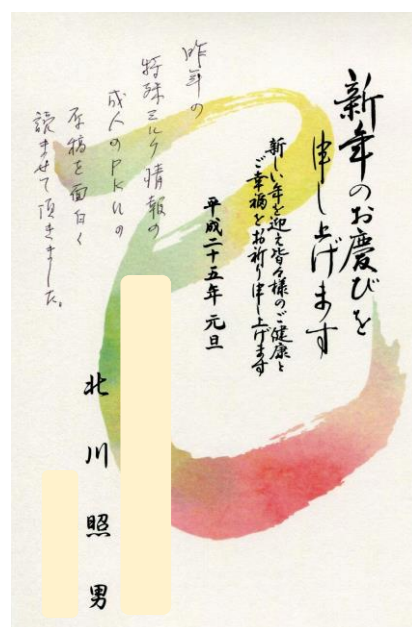
北川照男先生は昭和25年の慈恵医大ご卒業ですので、昭和56年卒の自分には31年先輩にあたります。日本先天代謝異常学会をはじめ、小児の代謝、内分泌、腎臓領域の重鎮であり、神様のような存在と思っておりました。

私が埼玉県立小児医療センター代謝内分泌科の科長になってから、東京都の新生児マススクリーニングで発見された患者さんの件でご連絡をいただくなど、直接お話をさせて頂いていただくようになりました。学会などでお声をかけていただくこともありましたが、その際は学会発表の比ではないほど、大変緊張したことを覚えております。

そのような折に、埼玉県立小児医療センター代謝内分泌科の元上司の山口修一先生と共著で、特殊ミルク情報に「充実した社会生活を送っているフェニルケトン尿症の成人男性」という拙文をかかせていただきました(特殊ミルク情報 第47号 2011年11月 P35-37)。その翌年の1月に、山口先生からメールがありました。北川先生から山口先生宛の年賀状の写真が添付されていました。そこには「昨年の特特殊ミルク情報の成人のPKUの原稿を楽しく読ませていただきました」と書かれていました(写真)。山口先生のメールには「北川先生は滅多に人のことを誉める先生ではありません。これは大変名誉なことですよ」とありました。自分にとってこれ以上うれしいことは人生のなかでほとんどありません。しばらく、毎晩このファイルを見ながら、晩酌を楽しんだことを覚えています(不謹慎ですみません)。

今でも一生の宝物として、私のスマホのアルバムに保存してあり、時々見返しています。

ほかの先生方と異なり、私と北川先生との関わりはごく限られたものです。しかし、このように、私に一生の宝物をいただくという、強烈なインパクトを残していただきました。北川先生に心よりの感謝とお礼を申し上げます。北川先生のご冥福をお祈りいたします。



北川先生から山口先生宛の年賀状

## 北川照男先生の思い出

城西大学 薬学部  
鈴木 健

私は、北川照男先生が日本マススクリーニング学会40周年記念号に寄稿する原稿を書くための資料をお届けするために、先生が2017年12月18日(月)にお亡くなりになる10日前の土曜日に、病室をお訪ねしました。先生は丁度食事中でおかゆと梅干を食べていて、私が資料をお渡しして早々に帰ろうとしたら、「逃げるのか。有難う、対応が早いね。」と笑いながらおっしゃいました。先生は大分お痩せになっていましたが、とても元気でしたので、まさか翌々週に亡くなるとは思いもしませんでした。

先生と初めてお会いしたのは、先生の教授室で、1974年(昭和49年)7月の夏の盛りの頃でした。先生と先生の前輩である東京慈恵会医科大学産婦人科教授であった東京母性保護医協会渡辺行正会長(現東京産婦人科医会)は、東京都地区で受益者負担による新生児先天代謝異常スクリーニングを行うに当たって、その検査を(財)東京都予防医学協会に委託することを計画しました。私は検査担当者として、スクリーニング法であるGuthrie法を教えるために先生をお訪ねしました。

お会いした先生は、柔和な端正な顔をしたスマートな白衣姿で、これぞ教授の中の教授、The教授であると、失礼ながら映画俳優を見るようにしみじみと見つめてしまいました。以来、44年間にわたって先生の温かいご指導を頂き、今日私があるのは先生のお蔭です。先生との長い間の思い出の中で、印象深いエピソードを2, 3紹介させていただきます。

私が初めて外国の学会で口演したのは、韓国Seoul市で開催された先天代謝異常学会で、Fabry病の障害酵素である $\alpha$ -Galactosidase活性および酵素蛋白を測定する方法について発表させて頂きました。英語で発表するので、辞書の発音記号と見比べながら原稿を読む練習を何回もして臨みましたが、緊張は極度のものでした。3人ほど質問があったのですが、日本語の回答を英語にできなくてまごまごしていたら、先生がすべて回答して下さいました。終わった後、先生に胃が痛くて食事喉を通りませんと申し上げたら、「胃が痛いのは、私の方だよ。」と笑っていました。先生は、私を心配しながらも発表する機会を与えて下さったのだと思いました。

帰国する時、順天郷大学小児科李東煥教授にバスの乗り方を注意されていたのですが、正規のルートで行けば7,8分のところを反対回りのバスに乗ったため30分以上掛かって、国際線ターミナルについた時は搭乗が締め切られていました。係員にとにかく走るように言われ、500mほどの距離を先生と走りましたが、先生の走るのが驚くほど早く、先生のお蔭で出発に間に合いました。

先生から聞いていた話で、小学生の頃は雨が降ると人力車で通っていた話、学生時代の軍事訓練の匍匐前進を命じられた時、ひっくり返った亀のように仰向けになって手足をバタバタさせて前進しようとして教官に大笑いされた話、医学部が埼玉県本庄児玉に疎開した時の炊事当番や夜中の

ノミ・シラミに耐えられず、近所の遠い親戚に下宿した話などから、先生の運動神経は少々もすると、と考えていましたが、とんでもない話で、先生は足が速いし、スタミナも十分で、問題なのは私の方でした。

久留米大学小児科山下文雄教授が学会長をされた日本マススクリーニング学会の中で、甲状腺機能低下症スクリーニングのシンポジウムが午後4時頃から開催されましたが、私と、大和田先生と、私の上司である業務課長と3人で抜け出して、久留米市で有名な串揚げ屋に行きました。翌日朝食の時、先生に呼ばれて、シンポジウムの時の不在を問い質されて、抜け出して串揚げ屋に行ったことを告げると、先生は怒った狐の面をかぶったような恐ろしい顔になって、「これからスクリーニングが始まるクレチン症に関する大切なシンポジウムを何故聞かないのか。何のために学会に勉強にきているのか」と怒られ、私は、恐ろしくて胸がわらわらと震え、足もぶるぶると震えました。先生に怒られたことはこの時一回だけですが、以降私は学会を抜け出したことはありません。

1997年、先生は、(財)東京都予防医学協会の理事長に就任されました。就任後、米国で開催された先天代謝異常学会から帰ってきた時、私は理事長室に呼ばれ、タンデム質量分析計を導入するからスペースを用意するように言われました。私は、検査室は狭くてスペースがないと申し上げると、「いいから、用意しろ」と強い口調で言われました。タンデム質量分析計は事務机ほどの大きさで、窒素発生装置、アルゴンガスなどの付属品もあって結構なスペースが必要で、困りましたが、結局私の机と週1度指導医としてお見えになっていた大和田先生の机もお許し頂いて、スペースを確保しました。(次頁へ)



写真:2012年4月2nd  
ACIMD/12th  
AEWIM in  
Koreaにて。  
(上)右から2番目に北川先生、一番右に鈴木先生。



(下) 2011年8月 PKU 親の会 関東にて。。

まず、Fabry病で細胞に蓄積される尿中GL3の測定法を確立し、次いで新生児スクリーニングで使用されている乾燥濾紙血液を用いた有機酸・脂肪酸代謝異常症の検査法を確立しました。そして、東京都の許可を得て、有機酸・脂肪酸代謝異常症のパイロットスクリーニングを行うため年間500名以上の出生がある病院を選択し、病気に関するパンフレット、同意書を携えて、先生に帯同してそれぞれの病院を訪ねました。先生自ら、東京大学小児科五十嵐隆教授、東京慈恵会医科大学小児科衛藤義勝教授を始めとして、日本大学板橋病院、愛育会病院、日赤医療センターなど20施設にパイロットスクリーニングへの協力を依頼して、了承されました。この間3年ほど経過していますが、先生が次から次と手を打つのを眼の当りにしながら、私にとってあつという間のことで、激流の中にいるような気がしていました。

体制が整ってから、島根大学小児科山口清次教授が研究主任である厚生省研究班に参加させて頂いて、約10年間でMCAD、プロピオン酸血症など9名の患者を発見しました。そして、2012年(平成24年)、有機酸・脂肪酸代謝異常症は公費で行われるようになりました。

先生は、常に”For the patients”を基に、簡明で誠実な行動力で学童の尿による糖尿病検診、新生児先天代謝異常症スクリーニング、発見された患者へのミルク供給のための特殊ミルク共同安全開発委員会、PKU親の会関東の指導など、先生の先見の明、地味ながら事業を進めていく確実な推進力など、先生のご指導を受けながら勉強や研究をさせて頂いたことは、私の宝であり、誇りでもあります。長い間本当に有難うございました。心より御礼申し上げます。

先生が亡くなられたことは、とても寂しいことですが悲しくはありません。ただ、余りにも思い出が多すぎて考えると呆然としてしまいます。

先生、どうか安らかにお休みください。  
また、お会いできましたなら、ご指導を賜りますようによろしくお願い申し上げます。



XIV CONGRESO INTERNACIONAL DE PEDIATRIA  
3 al 9 de octubre de 1974

1974.10.3-9 XIV international of pediatrics in Buenos Aires

## 北川照男先生の思い出

公益財団法人東京都予防医学協会 小児スクリーニング科  
科長補佐  
石毛信之

北川照男先生から筆者が直接ご指導いただくようになったのは、先生が1997年に財団法人(当時)東京都予防医学協会の理事長に就任されて以降のことです。ご就任当時、筆者は神経芽細胞腫のマススクリーニングに携わっておりましたが、その2年後に先天代謝異常症の新生児マススクリーニング(NBS)を行う代謝異常科(当時)に異動になりました。北川先生からは先天代謝異常症のマススクリーニングの学術的なことに加えて、NBSが果たす社会的な貢献とわれわれ検査施設が担う役割についてご指導いただきました。中でも、PKU親の会関東の会合に出席する機会をいただき、患者さんたちの元気な姿にお会いできたことが大変意義深く思います。診断された患者さんが元気に成長し、社会生活を営み、一生を全うすることができるようにすることがNBSの使命であると、北川先生は繰り返し強調しておられました。その崇高なお考えこそがわれわれのモチベーション向上の原動力となっています。

2001年、ひとつの大きな転機がありました。タンデム質量分析計(タンデムマス)の導入です。東京都予防医学協会では、北川先生の強力なご指導力と英国の研究者らの指導・援助によって、タンデムマスを使用したファブリー病のスクリーニング法の開発に着手することになりました。それまで本会ではタンデムマス分析の経験者はおいませんでしたが、北川先生のご判断で筆者がこれを担当することになりました。筆者としては、恥ずかしながら英語に不慣れでもあり、なんとも大変なことになった!と思ったものでしたが、諸先生方、装置メーカーの技術者の熱心な指導のおかげで良好な成果が得られるようになりました(写真1、2)。さらに4年後、厚生労働省研究班による有機酸・脂肪酸代謝異常症のNBS(タンデムマス・スクリーニング; TMS)の試験研究に参加させて頂いた際には、このときの分析技術の経験が十分に活かされました。ここに至るまでの技術の蓄積は、TMSが全国で開始された現在では後進の指導や二次検査法の開発に役立っております。

話題が前後しますが、2003年、北川先生はBrisbaneで開催されたthe 9th International Congress of Inborn Errors of Metabolism (ICIEM2003)にて上記のファブリー病の検査法の成績を報告なさいました。この会には、本年3月まで当科の代謝部門の指導医であられた大和田操先生も参加され、加えて筆者もお供させて頂きました。筆者にとっては初の海外であり、しかも両大先生と3人で約一週間の出張ということで心底緊張しました。出張中、何かと不十分な筆者を導いていただき、学会本会に加えて有機酸・脂肪酸代謝異常症やライソゾーム病に関わるsatellite meetingにも出席して貴重な知見を得るとともに、遊園地や動物園、近隣の自然公園に観光にも出かけてとても楽しく有意義に過ごせました(写真3、4)。

# JSIMD News Letter KITAGAWA MEMORIAL

北川先生の厳しくも熱意のこもったご指導のおかげで筆者自身は国内学会、研究会等に研究・検討成果を報告させていただき、数々のご高名な先生方と幸運にもお知り合いになる機会を得ることができました。まさに、北川先生の卓越した先見の明によるものです。北川先生のお蔭で本会の代謝異常症スクリーニング関係の仕事の現在があると筆者は思っております。マススクリーニング対象疾患の拡大等さらにご指導頂きたいと思っていたところで理事長を退任(2015年)され、昨年末に先立たれてしまいました。北川先生は筆者にとっては、偉大な指導者であると同時に、プライベートでは筆者の結婚のことまでご心配いただき、優しい祖父のようでもありました。心から感謝の念に絶えません。北川先生、どうかこれからも温かい目で見守ってください、厳しくご指導ください。北川先生のお人柄と偉業に対し、心から尊敬と感謝を捧げ、謹んで御冥福をお祈り申し上げます。



写真1(上):タンデムマスを始めた頃(北川先生、大和田先生、鈴木先生らと)

写真2(左):真剣に結果を見る北川先生

写真3(上)、4(下):2009年Brisbaneにて

## 北川照男先生を偲んで

日本大学医学部 小児科学系 小児科学分野  
日本大学病院 総合医療センター 小児科  
石毛 美夏

北川照男先生のご逝去に対し心よりお悔やみ申し上げます。

北川照男先生との出会いは、私の学生時代までさかのぼります。当時、私は日本大学医学部の1年生で室内楽アンサンブル部に所属しており、小児科に入局された先輩のご縁で、北川照男先生が大会長をされました第34回日本先天代謝異常学会(日本大学会館大講堂、東京)の懇親会で出し物の一つとして演奏をさせていただきました。非常につたない学生のアマチュア楽団の演奏でしたが、大会長のご多忙な中にわざわざ私どもの側まで聞きに来て下さり、懇親会終了後はねぎらいの言葉とともにご自身の著書をプレゼントしてくださいました。当時私は、将来自分が小児科医になること、そして先天代謝異常症を専門とすることなど夢にも考えておりませんでした、ご逝去直前まで変わることのなかった英国紳士を思わせる立ち振る舞いやロマンスグレーの風貌が強く印象に残っています。

その翌年には、定年のため日本大学医学部を退官されて日本大学総合科学研究所の教授にご就任されましたので、残念ながら、私が北川照男先生に小児科医として直接師事した時期はありません。本稿を書かせていただくにあたり、医師になってからのことをいろいろと思い出してみましたが、やはり出会いの印象が一番強く残っています。医局の先輩方からは、非常に厳しい先生であったとの声もお聞きますが、私が先天代謝異常症を専門とするところにはお年をとられたのか、よくご助言を下さいましたが優しい先生でした。

ご逝去の直前まで、病床にあってもフェニルケトン尿症やメープルシロップ尿症、タンデムマススクリーニングの話をしてくださり、アクセプトされた直後の医局員の論文が読みたいたと別刷をお届けするなど、医学に対して非常に真摯でアクティブにお過ごしでした。私がもう10年早く産まれていれば、直接ご指導をいただくことができ、様々なことをお教えいただけたのにと残念でなりません。ご冥福を心よりお祈りいたします。

## 北川照男先生との思ひ出

東京慈恵会医科大学小児科学講座  
小林 正久

北川先生は昭和25年卒業ですので平成8年卒業の私にとっては46年先輩にあたります(私は現在46才ですので、北川先生の半分しかまだ生きていません!)。まさに神様のような存在の先生でしたが、北川先生は一人の研究者として私と対等に接して下さいました。度々学会でお会いすることがありましたが、懇親会等で私の発表についていろいろディスカッションして下さいました。北川先生とのディスカッションは試問のようなところがあり、質問して下さる度に緊張が走りましたが、今思えば臨床上に非常に重要な内容ばかりで、先生からの質問を復習することはいつも非常に勉強になりました。またある時は、「君の今回の発表は、アカデミックさに欠けていたね」と、厳しいご指摘をいただいたこともありましたが、ちゃんと気にかけてくれているんだと思い、嬉しくもありました。

そのような折に、北川先生とファブリー病のスクリーニングの研究で共同研究をさせていただく機会をいただきました(Kitagawa T. Pediatr Nephrol. 2008;23: 1461-1471)。北川先生が尿中の $\alpha$ ガラクトシダーゼAタンパクの定量を行い、私が白血球中の酵素活性の測定と遺伝子解析を行い、臨床データと比較するという研究でしたが、北川先生は何か気になるデータがあると、「小林くん、これから君のデータを確かめに大学に伺ってもいい?」と電話を下さり、その30分後には本当に大学にいらっしゃいました。そのころ、先生はすでに80才を超えておりましたが、フットワークの速さ、疑問を追求する強い意志に、同じ研究するものとして私は深く感じ入りました。

北川先生から、研究者としてのスピリットを教えていただいたと思っております。本当にありがとうございました。北川先生のご冥福をお祈り申し上げます。

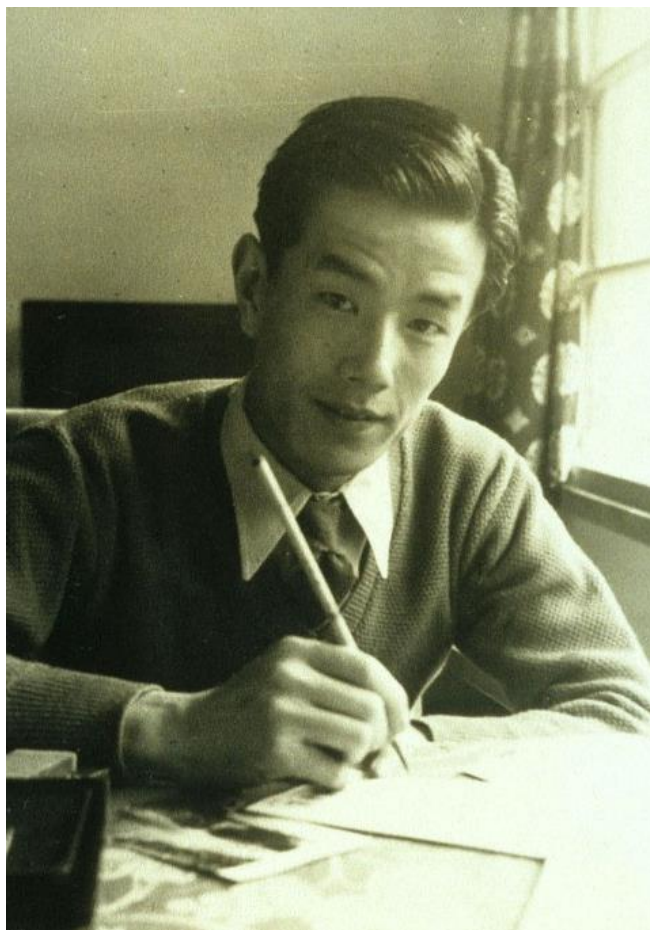
## 北川照男先生との思い出

東京慈恵会医科大学小児科学講座  
日本先天代謝異常学会事務局長  
櫻井 謙

私が初めて北川先生とお会いしたのは、2001年の第7回日本リビドーシス研究会(現、日本ライソゾーム病研究会)だったと思います。まだ、私が、先天代謝異常症をサブスペシャリティーにするとは思っていなかった頃でした。その年は、大学院に入った年で、はじめての研究会での発表でした。この研究会は、患者さんも多数出席されるという、それまでに経験したことが無いものでしたので、とても緊張したのを覚えております。そのような中で、私の父が、日本大学医学部で医学部長と病理学の教授をしていたこともあり、当時の私のメンターの東京慈恵会医科大学の大橋先生からか、北川先生と大和田先生をご紹介していただいたと思います。初めて北川先生にお会いした時の印象は、私が言葉にするのは大変失礼だとは思いますが、とても聡明で、紳士的で、昔で言う良い意味での「お医者様」、「なんでもこの先生なら任せられる」、そのような印象を受けました。それは、すらっとした外見だけでなく、優しい話し方であったり、和やかな表情をされたりといったことから、お会いされた方は、皆さん同じように思われるのではないかと思います。北川先生から、「病理へは進まなかったのですね。」、「代謝異常症をやられるのですか。」と聞かれ、「病理へは進みませんでした。代謝異常症をやるかはまだわかりません。」とお答え致しました。その後、私は先天代謝異常症の道を歩むことになり、何かの会でお会いすれば、ご挨拶をさせていただけるようになり、少しでも紳士的に振る舞えるように、お会いする度に、背筋を伸ばしていました。私が、2010年に米国留学から帰国した頃、私の勤務先の東京慈恵会医科大学葛飾医療センターは、東京都新生児マススクリーニング陽性者の精密検査施設に入っていなかったために、学会で北川先生にお会いした時にご相談させていただき、精密検査施設に入れていただけことができました。そのおかげもあり、現在では、当院で出産された新生児マススクリーニングでの陽性者だけでなく、数は多くはありませんが、近隣の病院や産婦人科施設からも紹介患者さんを受けようになりました。先生を通じて、日本大学の大和田先生、石毛美夏先生、東京都予防医学協会の鈴木健先生、石毛信之先生方とも交流させていただき、いろいろなことをご相談させていただけるようにもなりました。金城さんと私で学会の事務局を担当するようになってからは、学術集会にいらっしゃった時には、私たちの事務局にも立ち寄って下さり、労いのお言葉をかけてもらったりなど、いつも優しく気にかけていただきました。

先生がお亡くなりになられたことを耳にした時には、とても悲しくなりました。ほんの少しでも先生に近づけるように背筋を伸ばしてやっていきたいと思います。これからも天国から、先天代謝異常症の患者さんや学会のことをあたにかい目で見守って下さい。

安らかに眠り下さい。



若かりし頃の北川先生

## 北川照男先生 ご略歴

### <職 歴>

昭和25年 3月 東京慈恵会医科大学専門部卒業  
昭和25年 4月 日本赤十字中央病院(現日赤医療センター)インターン  
昭和26年 9月 東京慈恵会医科大学小児科学講座副手  
昭和30年 1月 東京慈恵会医科大学小児科学講座助手  
昭和34年12月 東京慈恵会医科大学小児科学講座講師  
昭和41年 4月 東京慈恵会医科大学小児科学講座助教授  
昭和46年 5月 日本大学医学部小児科学教授  
昭和51年 9月 日本大学医学部附属駿河台病院副病院長  
昭和58年 1月 韓国順天郷大学招請教授  
平成元年 5月 北京中日友好病院小児科名誉教授  
平成 4年10月 日本大学総合科学研究所教授  
平成 5年 4月 国際学院埼玉短期大学教授  
平成 6年 4月 国際学院埼玉短期大学副学長  
平成 6年 4月 日本大学名誉教授  
平成 8年 4月 学校法人国際学院常任理事  
平成 8年 7月 (財)東京都予防医学協会理事  
平成 9年 7月 (財)東京都予防医学協会理事長

### <役 職>

文部省学術審議会専門委員(昭和49年 2月～昭和50年12月)  
社会福祉法人恩賜財団母子愛育会特殊ミルク安全開発委員会委員長(昭和55年12月～平成29年12月)  
日本小児科学会理事(昭和57年 5月～昭和59年5月)  
日本先天代謝異常学会理事長(昭和 58年 10月～平成3年 11月)  
日本先天代謝異常学会理事(昭和 58年 10月～平成8年 3月)  
日本学術会議出生発達障害研究連絡委員会委員(昭和59年11月～平成6年10月)  
日本学術会議病態代謝研究連絡委員会委員(昭和59年12月～昭和63年7月)  
文部省学術審議会専門委員(昭和60年 2月～昭和63年 1月)  
文部省特定研究先天性代謝異常症研究班総括班長(昭和60年 4月～昭和63年 3月)  
日本学術会議遺伝医学研究連絡委員会委員(平成 3年 9月～平成9年9月)  
日本代謝異常スクリーニング研究会理事(昭和54年 9月～平成4年7月)  
日本マス・スクリーニング学会理事(平成 4年 6月 ～平成24年3月)

### <受賞歴・叙勲>

昭和60年11月 (財)腎研究会学術賞受賞  
昭和61年11月 日本人類遺伝学会賞受賞  
平成 4年 4月 紫綬褒章受章  
平成 9年11月 勲三等瑞宝章受章

